

ベトナム中部鉄器時代サーフィン文化の時間的・ 空間的枠組の再考

——副葬土器を中心に——

石井彩子

1. 序論

サーフィン Sa Huỳnh 文化は、紀元前500年もしくは300年頃から紀元後100年頃、ベトナム中部を中心に分布した鉄器時代の文化である。クアンガイ Quảng Ngãi 省サーフィン遺跡を標式遺跡とし、甕棺墓を主体とする埋葬遺跡が沿岸部の砂丘上や川沿いの平野部、内陸の山間部に立地する。サーフィン文化の遺跡から出土する土器は、墓に伴う副葬土器が主であり、器種・器形・文様ともにバラエティに富む。サーフィン土器は、ベトナム東南部や環南シナ海を越えたフィリピンの土器と類似する土器としても注目されているが、これまでの研究の中で、型式学的研究はほとんど行なわれていない。したがって、研究者間でサーフィン土器のイメージが異なったまま論じられることが多く、これによってサーフィン文化の時間的・空間的枠組の認識にも差異が生じている。

本論文では、サーフィン文化遺跡および関連遺跡を時期、地域ともに広く扱い、副葬品の構成と副葬土器の分析を通じて、サーフィン文化の時期区分と分布域、地域性を再考し、新たな時間的・空間的枠組の提示を試みたい。

2. サーフィン文化研究とその問題点

2-1. サーフィン文化遺跡の立地と分布域

山形真理子氏は、「長胴もしくは卵形の甕と、それと組み合わせられた帽子形の蓋を棺体とする甕棺墓が、副葬品を伴って縦置きで埋置されるという葬制が認められる時期と地域」としてサーフィン文化を定義している(山形 2009: 328)。しかし、サーフィン文化の分布域は、研究者によって意見が分かれている。例えば、ベトナム北中部クアンビン Quảng Bình 省から東南部ビントゥアン Bình Thuận 省と中部高原地域まで広がるとする意見(Sở văn hóa, Thể thao và Du lịch Quảng Ngãi 2009: 1、グエン・チュ 2010: 14)、ベトナム北中部トゥアティエン・フエ Thừa Thiên Huế 省からベトナム南部ホーチミン Hồ Chí Minh 市までとする意見(横倉 1987: 11、坂井・西村・新田 1998: 109、Nguyễn Khắc Sứ 2010: 64)、トゥアティエン・フエ省からカインホア

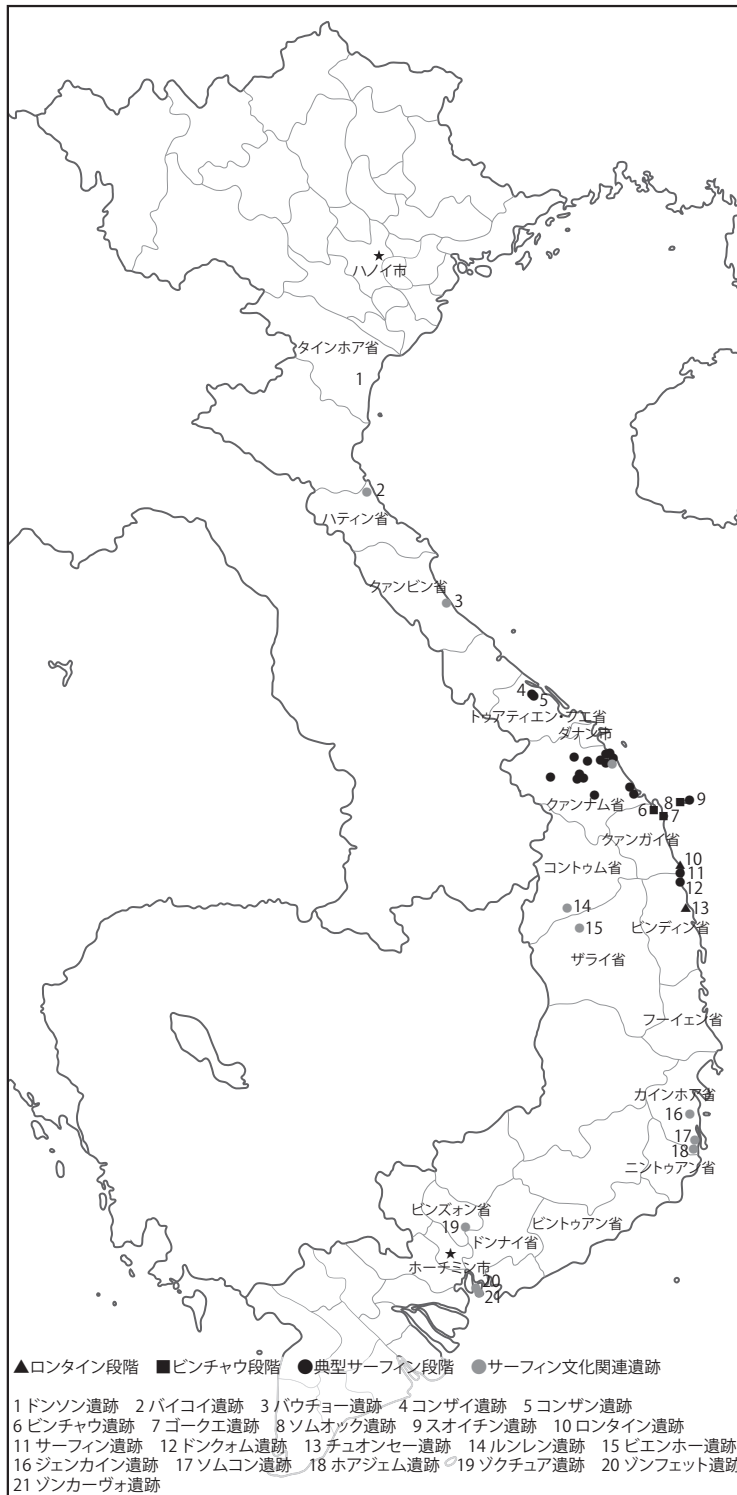


図1 ベトナムの遺跡分布地図

Khánh Hòa 省までとする意見（山形 2010b: 107）などがある。

2-2. サーフィン文化の時期区分—ロンタイン～ピンチャウ～典型サーフィン—

サーフィン文化は、鉄器時代に属する典型サーフィン段階よりも古い段階として、後期新石器時代または初期青銅器時代に属するロンタイン Long Thành 段階（紀元前2千年紀後半）と、青銅器時代に属するピンチャウ Binh Châu 段階（紀元前1千年紀前半）が設定されている（今村 1991、Vũ Công Quý 1991）。

ハ・ヴァン・タン Hà Văn Tấn 氏は、ロンタイン段階とピンチャウ段階、典型サーフィン段階の時期区分について、以下のように論じている（Ha Van Tan 1988）。古い段階の遺跡は青銅器時代に属し、典型サーフィン段階の遺跡は鉄器時代に属するという認識は研

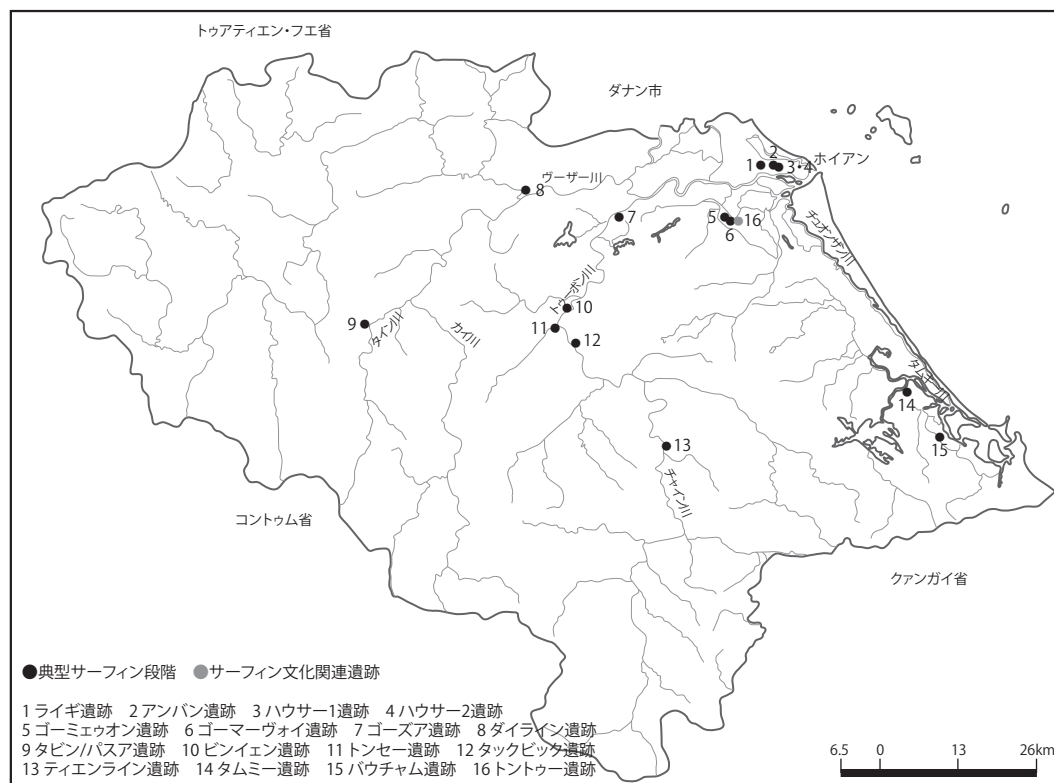


図2 クアンナム省の遺跡分布地図

研究者間で同一であるとした上で、古い段階の呼称は「初期サーフィン文化 the Early Sa Huynh Culture」または「青銅器時代サーフィン文化 the Sa Huynh Culture of the Bronze Age」とされる場合と、「先サーフィン文化 pre-Sa Huynh culture」とされる場合とに意見が分かるとしている。前者は青銅器時代の古い段階もサーフィン文化の一段階に含める意見で、後者は鉄器時代のみをサーフィン文化とする意見である (Ha Van Tan 1988: 15)。

グエン・カック・スー Nguyễn Khắc Sử 氏もハ・ヴァン・タン氏と同じく、鉄器時代より古い遺跡の中でも、サーフィン文化に直に発展したとされる遺跡、例えばクアンガイ省ロンタイン遺跡、ピンチャウ遺跡を「初期サーフィン文化 Proto Sahuynhian」、サーフィン文化の起源とならない遺跡を「先サーフィン文化 Pre Sahuynhian」として区分している (Nguyễn Khắc Sử 2010: 65)。

2-3. サーフィン土器

サーフィン文化の副葬土器は、甕棺内に副葬されるというよりも、甕棺の周囲、口縁部付近、蓋の上などに、土器の口縁部を下に向けて埋置されることが多い。土壙墓の場合は、土器は遺骸

の脇に直線の列を成して埋置される。サーフィン土器には様々な器種・器形が存在し、単独の技法もしくは複数組み合わせさせた技法でパターンを成して、文様が描かれる。また、これらの土器は叩き技法⁽¹⁾によって製作されるため、しばしば胴部に縄蓆文が残る。

以下にサーフィン土器の先行研究を挙げる。

<ライネカー Reinecke 氏らによるゴーマーヴォイ Gò Mã Vôi 遺跡出土土器の分類> (Reinecke, A., Nguyễn Chiếu, Lâm Thị Mỹ Dung 2002)

ライネカー Reinecke 氏、グエン・チュウ Nguyễn Chiếu 氏、ラム・ティ・ミー・ズン Lâm Thị Mỹ Dung 氏らは、クアンナム Quảng Nam 省トゥーボン Thu Bồn 川流域の典型サーフィン段階に属するゴーマーヴォイ Gò Mã Vôi 遺跡で、1998年から2000年の間に3次にわたる発掘調査を行なった。ライネカー氏らは報告書の中で、出土土器ほぼ全点の写真または実測図を掲載するとともに、器種を【「鍋」(ベトナム語で「鍋」の意味を持つ「ノイ nôi」)、台付「鍋」、「コップ形」、「ランプ形」、皿・浅鉢、台付皿・台付浅鉢、その他、台、不明】の9種、文様を【無文、帯状刻線文、S字文+三角文、貝殻腹縁文、黒または灰の彩色、赤の彩色、その他、縄蓆文】の8種に分類している。

<グエン・チュウ氏によるサーフィン土器の器種・器形分類> (グエン・チュウ 2010)

グエン・チュウ氏は、クアンナム省出土のサーフィン土器を中心として、器種を【「鍋」、「乳房土器」、台付甕形、高坏形、鉢形、「コップ形」、「ランプ形】の7種に分類した上で、器形の細分を行なっている。特に「鍋」について、胴部が湾曲するか屈曲するかで2種に大別した上で、これをさらに口縁部と頸部の形態によって細分している。

<山形真理子氏による土器から見た典型サーフィン段階の時期区分> (Yamagata 2006、山形 2009; 2010a; 2010c)

山形氏は、クアンナム省トゥーボン川流域の典型サーフィン段階の遺跡について、2段階に時期区分をしている。山形氏は古い方をI段階、新しい方、特に典型サーフィン段階の最終段階をII段階とした上で、出土する甕棺、土器、装身具などの副葬品の差異を指摘している。特に土器は、I段階では器形・文様のバラエティに富むが、II段階では器種が少なく、文様も無文または縄蓆文のみになるとしている。また、山形氏は、サーフィン土器の器種構成の中心は「鍋」であると指摘している (山形 2010a)。

2-4. 問題点

サーフィン土器の先行研究における問題点を挙げれば、まず、ライネカー氏らによって分類さ

れた「鍋」は、口縁部・胴部・底部いずれも形態が様々で、壺や鉢など複数の器種が含まれており、1器種にまとめることはできない。グエン・チュウ氏の器種・器形分類では、「鍋」を形態で細分しているが、これは器形の差異の抽出という認識であり、壺や鉢といった器種を新たに抽出した訳ではない。これらをふまえて、山形氏も指摘しているように、典型サーフィン段階の土器の器種構成の中心が「鍋」であるとすれば、この「鍋」を器種・器形で細分することで、ライネカー氏らやグエン・チュウ氏の分類を再考することができ、典型サーフィン段階の土器の構成を明らかにすることができる。また、これをもとに、ロンタイン段階、ビンチャウ段階の土器と比較することで、各段階の時間的・空間的枠組を設定する上での一助となり得る。

そもそも、サーフィン文化の時期区分と分布域、地域性についての問題点として、時間的・空間的枠組に対する研究者間の意見の相異が、サーフィン文化の概念や認識をより複雑化しているという点が挙げられる。これは、いずれの意見についても、遺物の詳細な検討によるものではないなど、何をもって定義付けを行なったのかが明らかでないことにも起因する。

以上をふまえて、第一に、時間的枠組の再考として、これまでに設定されているロンタイン段階とビンチャウ段階、典型サーフィン段階という時期区分について、前者の2つの段階をサーフィン文化の一段階に含めるべきか否かということを確認にすべきである。そして、空間的枠組の再考として、サーフィン文化の分布域を設定するにあたって、指標となる要素を明らかにすべきである。

以上のように時間的・空間的枠組を再考するために、本論文においては、典型サーフィン段階の土器の器種・器形・文様の構成を明らかにした上で、ロンタイン段階、ビンチャウ段階、典型サーフィン段階それぞれについて、副葬品の構成と、副葬土器の器種構成を分析し、各段階の定義付けを試みる。また、典型サーフィン段階の土器の器種のうち「ランプ形土器」の型式分類を行ない、サーフィン文化の指標要素となり得るかを検討する。

3. 分析の対象と方法

3-1. 分析の対象

本論文では、主に長胴形または卵形の甕棺と帽子形の蓋の甕棺墓が存在する、ベトナム中部トゥアティエン・フエ省、クアンナム省、クアンガイ省、ビンディン Binh Định 省を対象地域とする。対象遺跡は、対象地域におけるロンタイン段階、ビンチャウ段階、典型サーフィン段階に属する埋葬遺跡である。また、「ランプ形土器」の分析にあたって、ベトナム南部ホーチミン市カンゾー Cần Giỏi 区ゾンカーヴォ Giồng Cá Vồ 遺跡も関連遺跡として対象に含める。対象遺跡は、いずれも墓1基の副葬品の構成が把握でき、かつ出土土器の写真や実測図が得られる遺跡、および「ランプ形土器」が出土している遺跡である。対象遺物は、サーフィン文化の甕棺墓または土壙墓に伴う副葬品としての土器である。

3-2. 分析の方法

3-2-1. 分析の方法

分析①：典型サーフィン段階の副葬土器の器種・器形・文様の分類を行ない、器種・器形・文様の構成を明らかにする。

分析②：12遺跡計365基の墓について、墓1基に伴う副葬品と副葬土器の構成を概観し、ロンタイン、ビンチャウ、典型サーフィン各段階の差異を明らかにする。

分析③：「ランプ形土器」について、器形・文様の型式分類を行ない、この器種の時期区分、分布域、地域性を考察する。

3-2-2. 器種・器形・文様の分類項目

本論文では、土器の種類を指す場合はこれを器種と呼ぶ。器種の中で、形態によって細分したものを指す場合はこれを器形と呼ぶ。器種の呼称は、ベトナム考古学で用いられている用語に倣う。特に、ベトナム考古学で「ノイ nôi」と表記される「鍋」は、日本考古学で言うところの壺や鉢といった複数の器種の総称として用いられている。しかし、報告書などの文献の中では「鍋」と記載されるのみで、器形が不明であることが多いため、本論文の分析上では「鍋」という呼称を便宜的に用いる。

器種は、【「鍋」、台付「鍋」、皿・浅鉢、台付皿・台付浅鉢、「コップ形」、「ランプ形」、「花瓶」】の7種に分類し、器形は口縁部、頸部、胴部、底部の形態によって分類する（カギカッコ付はベトナム考古学における呼称を引用したもの）。

文様は、技法で【無文、刻線文、刺突文、沈線文、貝殻腹縁文、赤の彩色、黒または灰の彩色、叩き文、縄蓆文】の9種に分類し、かつこれらの技法を組み合わせた文様パターンも検討する。このうち叩き文および縄蓆文は、他の文様技法とは異なり製作技法であるが、サーフィン土器では叩き痕を意図的に残して文様とする場合が多いため、本論文では叩き文と縄蓆文も文様技法の一つとして扱うこととする。

4. 分析と考察

4-1. 典型サーフィン段階の土器の器種・器形・文様分類

典型サーフィン段階に属するクアンナム省ゴーマーヴォイ遺跡は、出土土器の点数が多く、報告書にはほぼ全点の写真または実測図が掲載されている。また、報告者によって基礎的な土器分類が提示されているため、器種分類はこの分類に倣い、これに加えて器形と文様の細分を試みた。

対象とする土器は、1998年から2000年の発掘調査で出土した計189点である。うち「鍋」は108点（57.1%）、台付「鍋」は27点（14.3%）、皿・浅鉢は6点（3.2%）、台付皿・台付浅鉢は33点（17.5%）、「コップ形」は2点（1.1%）、「ランプ形」は2点（1.1%）、その他は11点（5.8%）で

ある（図3～7）。

<器形分類>

各器種について、器形分類を行なった（図3～7）。本分類では「鍋」を壺と鉢の2器種に大別した上で、両器種の器形を細分した。

「鍋」のうち、壺は80点（「鍋」の74.1%）であり、器形で4種に分けられる。この中で最も多く出土している器形は図3中の1～5であり、54点と、壺の67.5%、「鍋」の50%を占めている。壺では、胴部が湾曲する器形が58点と、壺の72.5%を占めている。一方、鉢は17点（「鍋」の15.7%）であり、器形で5種に分けられる。この中で多く出土している器形は図3中の11または15である。

台付「鍋」のうち、台付壺は23点（台付「鍋」の85.2%）であり、器形で6種に分けられる。この中で最も多く出土している器形は図4中の2、3であり、7点と、台付壺の30.4%、台付「鍋」の25.9%を占めている。台付壺では、胴部が屈曲する器形が11点と、台付壺の約半数（47.8%）を占めている。また、台付壺は、台の付かない壺よりも器形のバラエティに富んでいる。一方、台付鉢は2点（台付「鍋」の7.4%）のみで、2点とも口縁部が内傾し、胴部が湾曲する器形である（図4 - 10・11）。

皿・浅鉢の器形は3種に分けられる。この中で多く出土している器形は図5中の1であり、皿・浅鉢6点のうち4点と、66.7%を占めている。

台付皿・台付浅鉢の器形は5種に分けられる。この中で最も多く出土している器形は図6中の1～3であり、台付皿・台付浅鉢33点のうち17点と、約半数（51.5%）を占めている。

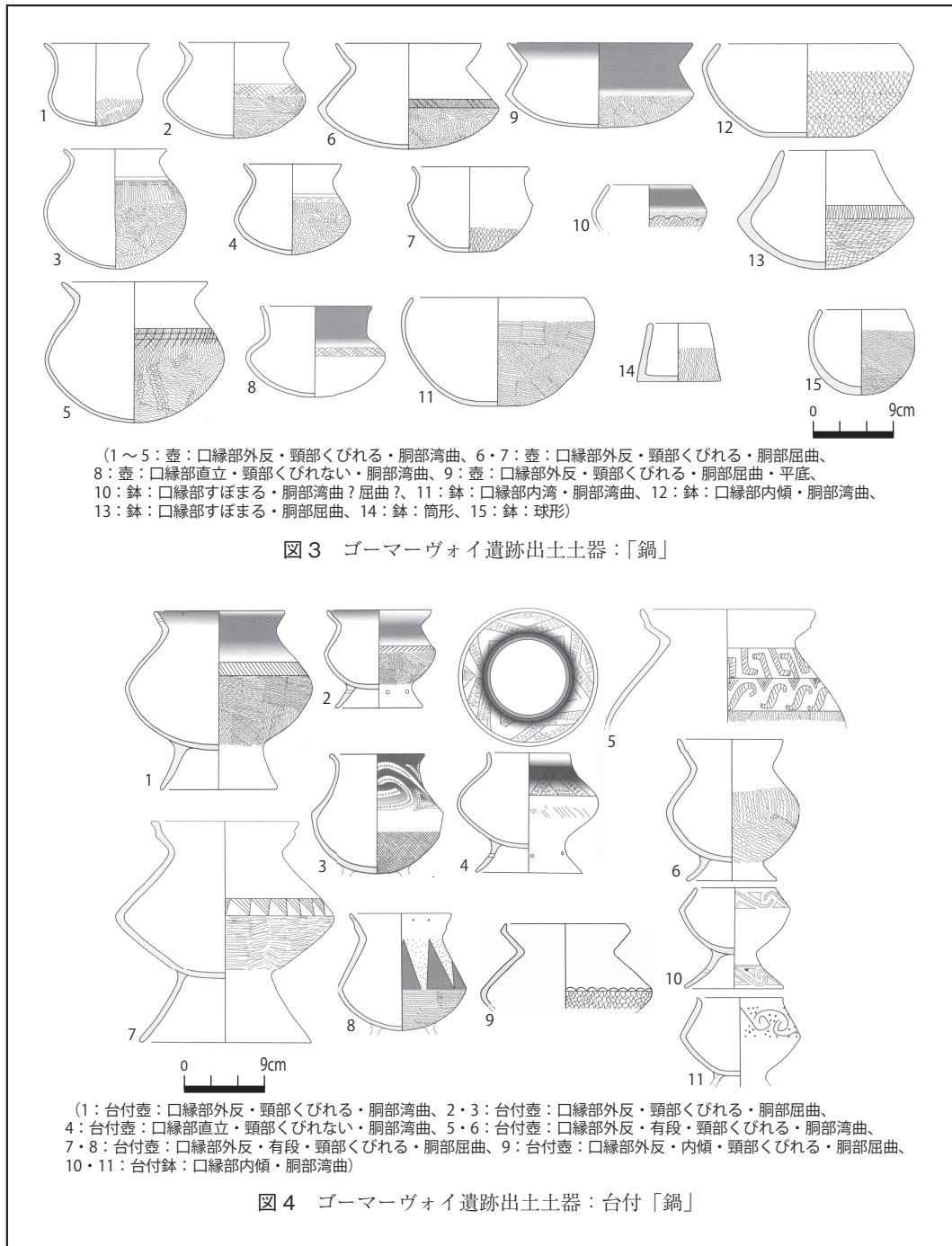
「コップ形」は、2種の器形がそれぞれ1点ずつ出土している（図7 - 1・2）。「ランプ形」は、出土している2点のいずれも断面Y字形の口縁部である（図7 - 3・4）。

<文様分類>

「鍋」のうち壺は、縄蓆文のみか、縄蓆文と刻線文、沈線文が組み合わさるものが大多数を占める。頸部下から口縁部までは縄蓆文が磨り消されて無文であり、胴部から底部には縄蓆文が残される。鉢も同じく、縄蓆文のみのもものが多数を占めるが、無文のものも多い。台付「鍋」のうち台付壺は、複数の技法でS字文やZ字文、三角文などの複雑な文様パターンが描かれることが多い。台付鉢は、いずれも単純な文様である。

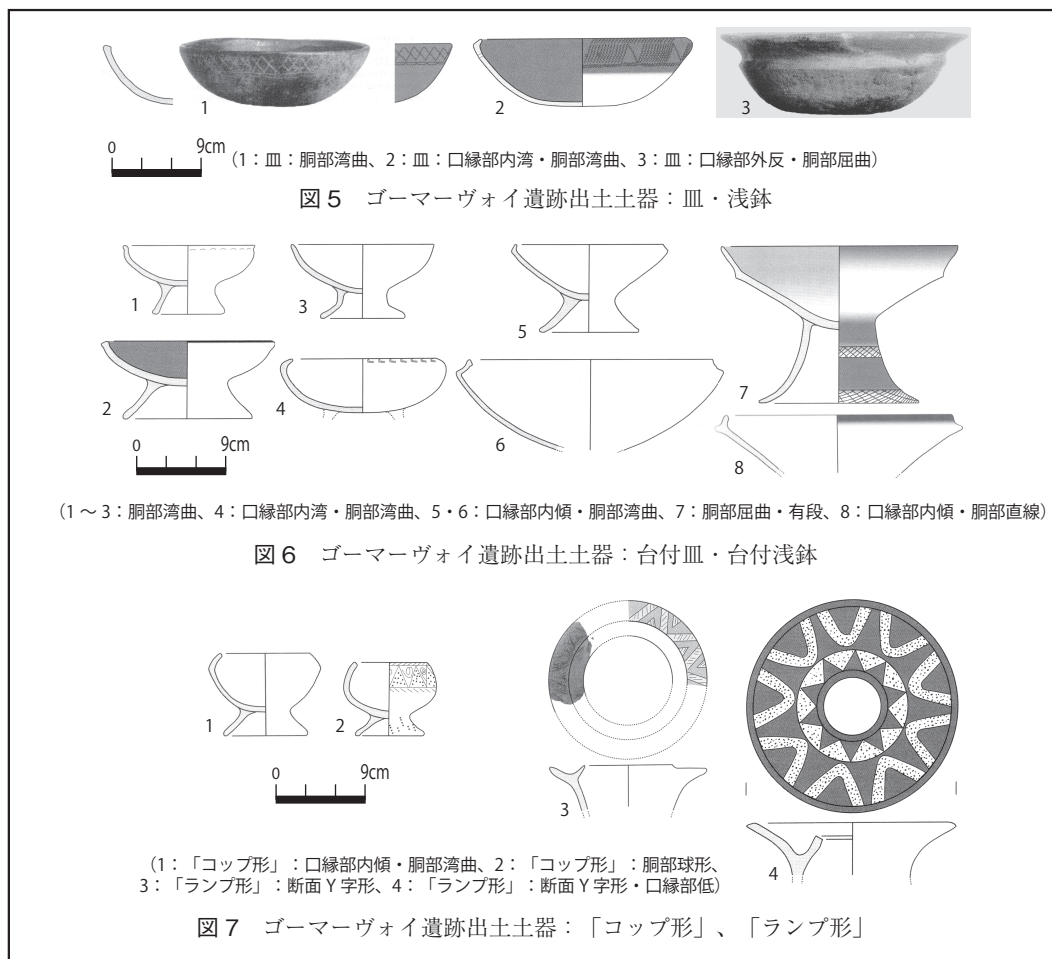
皿・浅鉢は、無文の1点を除く5点のいずれにも、黒または灰の彩色が見られ、これと縄蓆文や貝殻腹縁文が組み合わさることもある。台付皿・台付浅鉢は、無文が主であり、次に黒または灰の彩色のみのもものが多数を占める。

「コップ形」、「ランプ形」は、「コップ形」の1点が無文である他、いずれも複数の技法を用い



て三角文などの文様パターンが描かれている。

以上の分析から、典型サーフィン段階の土器の器種構成は、【壺、鉢、台付壺、台付鉢、皿・



浅鉢、台付皿・台付浅鉢、「コップ形」、「ランプ形」の8種に大別できる。これらのうち、首座を占める器種は壺であり、特に、口縁部が外反し、頸部がくびれ、胴部が湾曲する器形が中心となる。このタイプの壺の文様は、胴部から底部に縄文が残り、頸部下から口縁部までの縄文は磨り消される。このような壺が、典型サーフィン段階において最も典型的な土器であるといえる（例えば図3 - 3）。

4-2. ロンタイン、ピンチャウ、典型サーフィン各段階の副葬品と土器

4-2-1. ロンタイン段階

ロンタイン段階に属するクエンガイ省ロンタイン遺跡において、1978年の第2発掘区（H2）で検出された甕棺墓16基が分析対象である。ロンタイン遺跡の甕棺の形態は「鍋」形または卵形で、蓋には「鍋」または台付皿・台付浅鉢が代用される。

表1 ロンタイン段階の副葬品と土器

発掘年	発掘坑/ 発掘面積	墓 No.	葬棺	蓋	土器				土製品		石器						装身具 石製				
					「鍋」	「花瓶」	台付皿・ 台付浅鉢	その他	漁網錘	不明	礫	斧	鍬	ポイント	磨石	臼	杵	耳飾	ビーズ		
1	1978	H2	M1	1「鍋」形		2			破片												
2			M2	1 1台付皿・ 台付浅鉢		1(破片)															
3			M3	1卵形 1「鍋」		3	1		破片				1								
4			M4	1卵形 1台付皿・ 台付浅鉢		1	2		破片		有										
5			M5	1「鍋」形		1															
6			M6	1卵形		1		2					1	1							
7			M7	1卵形 1「鍋」		4	1					1							4	18	
8			M8	1卵形		4	1														
9			M9	1卵形		1	破片	1													
10			M10	破片		1	2	2	1												
11			M11	1卵形		1		2													
12			M12	1卵形		1															
13			M13	1卵形		1															
14			M14	1卵形		1	4	3						1						1	
15			M15	1卵形 1台付皿・ 台付浅鉢		3	2	1		1				1					1	2	
16			M16	1		1		2													
			計		18	15	12	21	21	4	0	1	-	1	1	3	1	1	1	4	21

副葬品は土器と石器が主で、他に土製漁網錘、石製ビーズ、石製耳飾が出土している。ロンタイン遺跡では、金属器は出土していない（表1）。

土器の器種は「鍋」、「花瓶」、台付皿・台付浅鉢の3種のみであり、ロンタイン遺跡では「鍋」と「花瓶」が副葬土器の首座を占める（図8）。

「鍋」は、壺と鉢を含む3種に大別できる。これは、①口縁部が外反し、頸部がくびれ、胴部が湾曲する壺（図8 - 1～4・9）、②口縁部が垂直に立ち上がり（またはわずかに外反し）、胴部が湾曲する壺（図8 - 5～8）、③口縁部がわずかに外反し、頸部がくびれ、胴部が湾曲する鉢（図8 - 10）の3種であり、ミニチュア壺も含まれている。これらのほとんどに縄蓆文が見られ、刻線文と沈線文を組み合わせ、曲線や三角文を描いたものもある。

「花瓶」の胴部の器形は、胴部最大径部で湾曲するもの（図8 - 11～14）と屈曲するもの（図8 - 15）の2種に大別できる。屈曲するタイプは、湾曲する胴部に断面三角形の凸帯を張り付けて、屈曲部をつくっている。このような凸帯を張り付ける装飾は、胴部最大径部の他に頸部、口縁部付近にも見られる。文様はいずれも刻線文、沈線文などを組み合わせ、曲線や三角文を描いている。

台付皿・台付浅鉢は、口縁部付近に段を有し、口縁部がわずかに外反する（図8 - 16・17）。台付皿・台付浅鉢もまた、刻線文や沈線文を組み合わせた複雑な文様が描かれる。

4-2-2. ビンチャウ段階

ビンチャウ段階に属するクアンガイ省ビンチャウ遺跡において、1978年の発掘で検出された土坑墓9基が分析対象である。ビンチャウ遺跡では、ロンタイン段階や典型サーフィン段階とは異なり、土壙墓のみが検出されている。

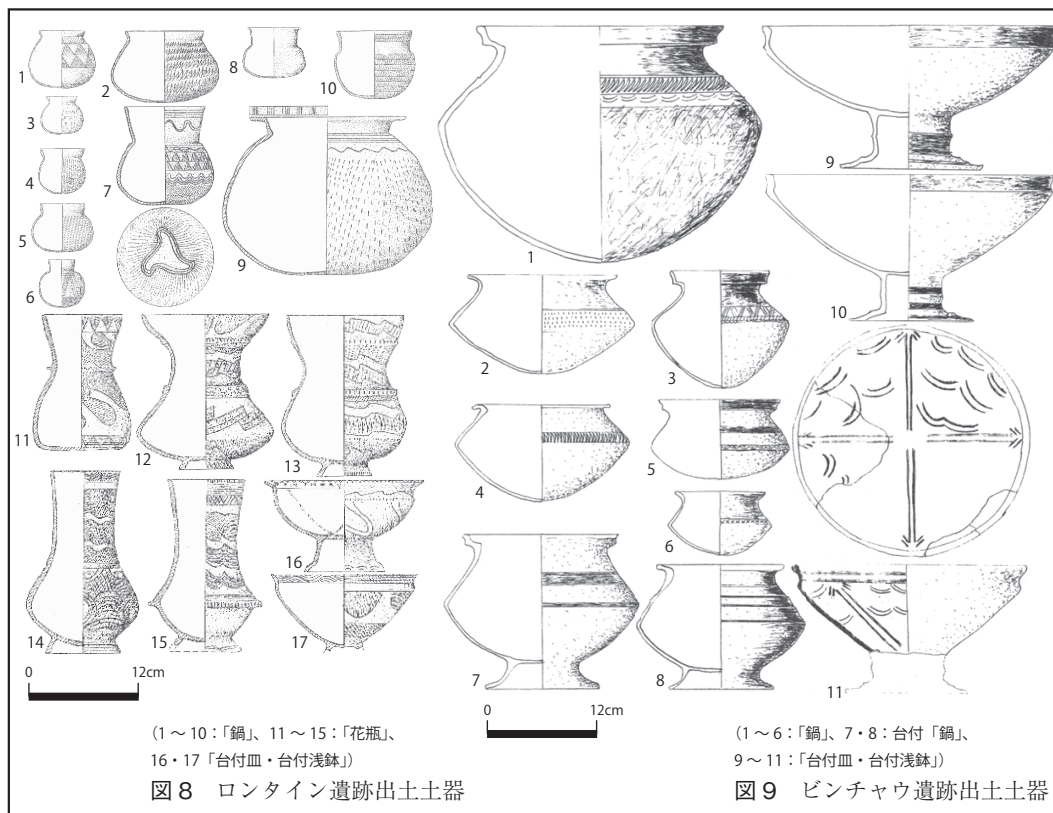
副葬品は土器と青銅器が主で、他に土製漁網錘、土製耳飾が出土している。ビンチャウ遺跡では、青銅器は出土しているが、鉄器は出土していない（表2）。

土器の器種は「鍋」、台付「鍋」、台付皿・台付浅鉢の3種のみであり、ビンチャウ遺跡では「鍋」が副葬土器の首座を占める（図9）。

「鍋」の器形は、口縁部が外反し、頸部がくびれ、胴部が屈曲する壺のみである（図9 - 1～6）。これに低く裾部が広がる台を付けたものが台付「鍋」となる（図9 - 7・8）。口縁部は、段の有無で2種に分けられる。ビンチャウ遺跡の土器は文様のバラエティも少なく、赤の彩色を

表2 ビンチャウ段階の副葬品と土器

発掘年	発掘坑/発掘面積	墓No.	墓	土器			土製品	青銅器					装身具	
				「鍋」	台付「鍋」	台付皿・台付浅鉢	漁網錘	不明	鏃	槍先	鑿	器	土製耳飾	
1978	H3	M1	土壙墓	1		1	1							
2		M2	土壙墓	2	1	1								
3		M3	土壙墓	2				1	1					
4		M4	土壙墓			1		2		2			1	
5		M5	土壙墓	2	1	1		1	1					
6		M6	土壙墓	4	1	1								
7	H4	M7	土壙墓	1	1	1		1	1				2	
8	発掘坑外	M8	土壙墓					2	1			1 (破片)		
9	発掘坑外	M9	土壙墓	1										
		計	9	13	4	6	1	7	4	2	1	2	2	



施した地の上に、沈線文で帯状の区画を描き、この帯状文の中を黒の彩色または刻線文で充填するパターンが多い。これは「鍋」、台付「鍋」、台付皿・台付浅鉢すべてに共通するパターンである。「鍋」、台付「鍋」の施文は、胴部最大径部もしくはこの胴部上半部に施される。

台付皿・台付浅鉢は、口縁部付近に段を有する（図9 - 9～11）。有段部から口唇部にかけての凹面と台には帯状の彩色が施されるが、胴部は無文である。

4-2-3. 典型サーフィン段階

トゥアティエン・フエ省コンザイ Côn Dài 遺跡、コンザン Côn Ràng 遺跡、クアンナム省ビンイエン Bình Yên 遺跡、ゴーズア Gò Dừa 遺跡、ゴーマーヴォイ遺跡、タビン/パスア Tabhing/Pa Xua 遺跡、タックビック Thạch Bích 遺跡、タムミー Tam Mỹ 遺跡、ティエンライン Tiên Lãnh 遺跡、ビンディン省ドンクォム Đông Cườm 遺跡の10遺跡における、甕棺墓327基と土壙墓13基、計340基が分析対象である。

墓1基に副葬される副葬品は、土器を中心として、鉄器、石製・ガラス製装身具である。しばしば青銅器、石器、土製紡錘車なども副葬される（表3）。

典型サーフィン段階の土器の器種構成は、4-1. で見たように、【壺、鉢、台付壺、台付鉢、皿・浅鉢、台付皿・台付浅鉢、「コップ形」、「ランプ形」】の8種であり、いずれも器形・文様のバラエティに富む（図3～7、表3）。典型サーフィン段階では、これらのうち、口縁部が外反し、頸部がくびれ、胴部が湾曲する、かつ縄蓆文がつく壺が首座を占める（例えば図3 - 3）。「コップ形」、「ランプ形」は典型サーフィン段階のみで見られる器種であり、特に「ランプ形」は器形・文様ともに他の器種とは異なる要素を持っている。

遺跡ごとに器種構成を見ると、いずれの遺跡においても「鍋」が最も多く出土している点は共通しているが、ビンイエン遺跡の第2発掘坑（H2）とゴーズア遺跡では他の遺跡と様相が異なっている。他の遺跡では、皿・浅鉢と台付皿・台付浅鉢ともに少数である一方、ビンイエン遺跡（H2）とゴーズア遺跡では、皿・浅鉢が多く出土している。また、台付皿・台付浅鉢は出土していない。これら2遺跡からは、前漢鏡が出土しており、典型サーフィン段階の最終段階に位置付けられている。つまり、典型サーフィン段階の中でも時期によって器種構成が異なり、時期を経るごとに器種・器形のバラエティが少なくなるといえる。

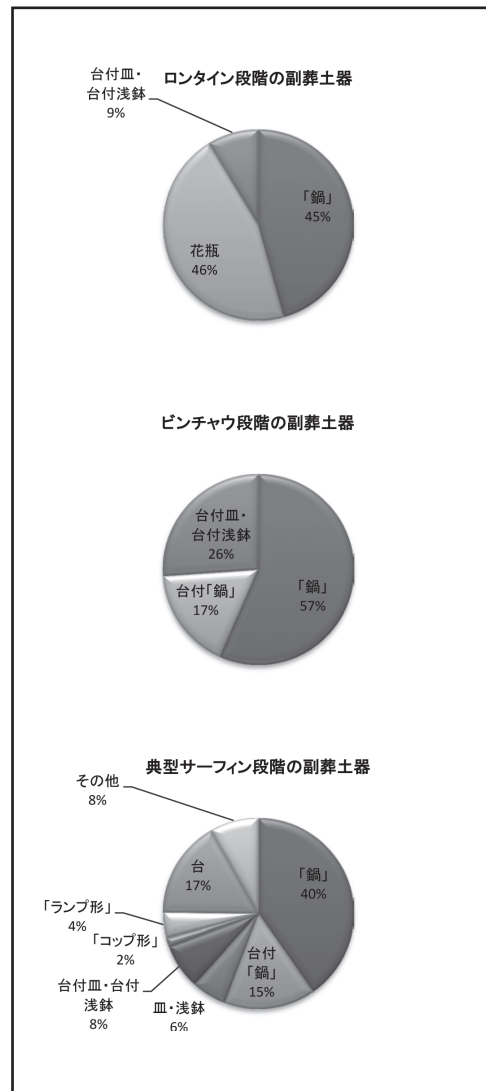
4-3. 「ランプ形土器」の型式分類

4-3-1. 「ランプ形土器」の概要

「ランプ形土器」は、口縁部の外側、胴部上半に円盤状の皿部を持ち、胴部はわずかにくびれ、胴部の下部には台が付くという器形である。これはロンタイン段階とビンチャウ段階の土器には存在せず、ベトナム全域を見ても、典型サーフィン段階またはサーフィン文化関連遺跡の埋葬遺

表3 典型サーフィン段階の副葬品と土器

墓 No.	要格	墓	土器										青銅器				石器	骨器	埋葬具													
			「罎」		台付「罎」		台付皿・浅鉢		「コップ形」		「ランプ形」		台		鉄器				銅		土製		石製		ガラス製		石のガラス製の器		青銅製		金製	
			罎	浅鉢	皿・浅鉢	台付浅鉢	コップ形	台付浅鉢	皿・浅鉢	台付浅鉢	コップ形	台付浅鉢	台	その他	紡錘車	鉄器			銅	銀	土製	石製	ガラス製	石のガラス製の器	青銅製	金製	不明	不明	不明	不明		
トアチエンフエ省																																
コンチア重跡																																
31	19	16	5	0	2	0	4	6	0	1	8	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
216	170	111	87	8	1	11	28	86	20	0	152	2	0	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
クアンナム省																																
ビンロン重跡																																
9	8	18	3	16	1	0	0	0	2	1	28	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
11	5	3	0	3	0	0	0	0	0	2	20	4	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
13	11	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
20	24	108	27	8	33	2	41	11	10	21	30	0	4	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
3	2	13	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
2	12	17	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
24	11	48	3	9	12	0	2	0	2	12	19	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
2	1	10	3	4	4	0	0	1	6	0	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
7	3	6	4	2	8	0	0	0	0	33	4	5	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
トアチエン省																																
ドンケム重跡																																
22	16	1	9	0	1	4	0	0	1	2	8	3	0	0	4	1	0	0	1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
340	290	72	343	132	50	65	13	37	141	70	334	46	2	4	35	4	6	32	0	46	517	1	5	1348	1	0	53	10	0	3	2	



跡でのみ出土していることから、副葬土器の一器種として、典型サーフィン段階に特有の土器であるといえる。

これまでに出土が確認、報告されている「ランプ形土器」は、筆者が把握している限りで64点、出土地等不明なものを含めると計71点である。いずれも完形もしくは口縁部・皿部が残存する個体を1点として数えている⁽²⁾⁽³⁾。

4-3-2. 「ランプ形土器」の分析

<器形・文様の分類項目>

71点のうち、写真または実測図が得られている計55点について、器形・文様分類を行なった(表4)。器形分類では、口縁部・皿部の形態をAからFの6種とG(その他)、台をaからcの3種とd(その他)に分類した(図10・11)。文様分類では、技法を6種に分類し、これらを単独または複数組み合わせた文様パターンを8種に分類した(図12)。

<器形分類>

口縁部・皿部を見ると、A類、C類、D類、E類、F類はそれぞれ、限定された地域のみで存在する。一方、B類は、いずれの地域にも存在しており、点数も最も多いことから、「ランプ形土器」の口縁部・皿部の首座を占める形態であるといえる。

台を見ると、c類は、クアンナム省ホイアン Hôi An 付近の限定された地域のみで存在する。a類とb類は、ホイアン付近を除くいずれの地域にも存在するが、特にa類は、「ランプ形土器」の台の首座を占める形態であるといえる。また、その他(d類)の2点のうち、ゾンカーヴォ遺跡から出土した1点は、唯一、台が付かない。

口縁部・皿部の形態と、台の形態の組み合わせから、「ランプ形土器」の器形分類を行なった。口縁部・皿部と台は、形態の組み合わせがほぼ決まっているが、特にB類の口縁部・皿部にはa、b、c、d類の全種類の台が組み合わせり、また、a類の台にはB、C、D、E、G類の5種類の口縁部・皿部が組み合わせる。つまり、「ランプ形土器」の首座を占める器形は、口縁部・皿部B類と台a類のBaタイプである。これはいずれの地域においても最も多く存在する、「ランプ形土器」の典型的な形態である(図13)。

<文様分類>

「ランプ形土器」で最も多く用いられる文様技法は刻線文である。特に、刻線文でV字や三角形を描き、この中を刻線または刺突で充填する文様パターンが多い。

口縁部・皿部と台の形態ごとに文様を見ると、口縁部・皿部のA類とB類には、刻線文、刺突文、沈線文、貝殻腹縁文、彩色など複数の技法を組み合わせた、文様パターン5以外のパター

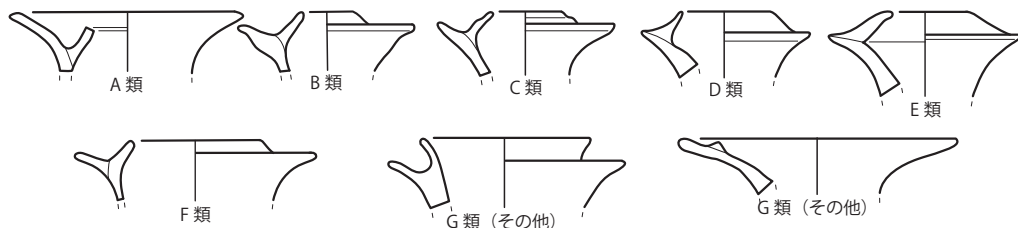


図 10 「ランプ形土器」の口縁部・皿部分類

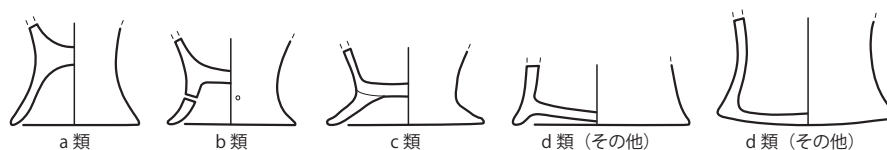


図 11 「ランプ形土器」の台分類

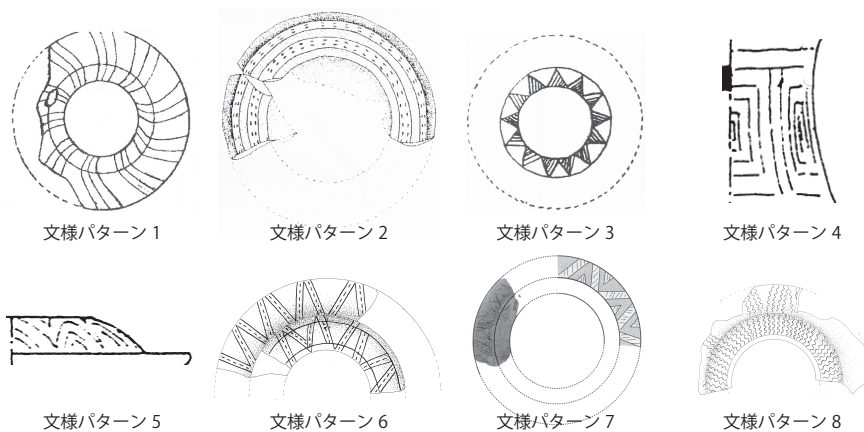


図 12 「ランプ形土器」の文様パターン分類

4-3-3. 小結：「ランプ形土器」の型式分類

<「ランプ形土器」の時期区分>

ランプ形土器の口縁部・皿部と台の変遷過程は、製作方法の簡略化したにすぎたものであるといえる。特に、変遷過程が後になるにつれて、徐々に皿部が形骸化していく傾向が見られる。青銅器や石器が多数出土し、また放射性炭素年代測定法による年代も含めて、古い時期に属するとされるクアンナム省ゴーマーヴォイ遺跡、ゴームィエウオン Gò Miéu Ông 遺跡出土の「ランプ形土器」は、皿部が大きく外反し、口縁部が皿部よりも低い。一方、漢系遺物が出土するなど、新しい時期に属するとされるホイアン付近の遺跡出土の「ランプ形土器」は、皿部は狭く水平、もしくは皿部の出っ張りがほとんどなくなる。また、これらはいずれも小形である。

以上のことから、口縁部・皿部の A 類を持つ「ランプ形土器」が最も古いと考えられ、続いて首座を占める Ba タイプが広く分布した後、① Bb タイプと Bc タイプ、② Ca タイプ、③ Da タイプと Ea タイプの 3 系統へと分化したと考えられる (図13)。

<「ランプ形土器」の地域性>

「ランプ形土器」は、口縁部・皿部と台の形態から、① A、B、C 類の口縁部・皿部と a、b 類の台の組み合わせ (図13 - A・Ba・Bb・Ca タイプ)、② B、D、E 類の口縁部・皿部と c 類の台の組み合わせ (図13 - Bc・Dc タイプ)、③ B、D、E 類の口縁部・皿部と a 類の台の組み合わせおよび F 類の口縁部・皿部と b 類の台の組み合わせ (図13 - Da・Ea・Fb タイプ)、以上の 3 グループに大別できる。これら 3 グループは①トゥアティエン・フエ省からクアンナム省内陸部の地域、②クアンナム省ホイアン地域、③クアンガイ省からビンディン省の地域という 3 地

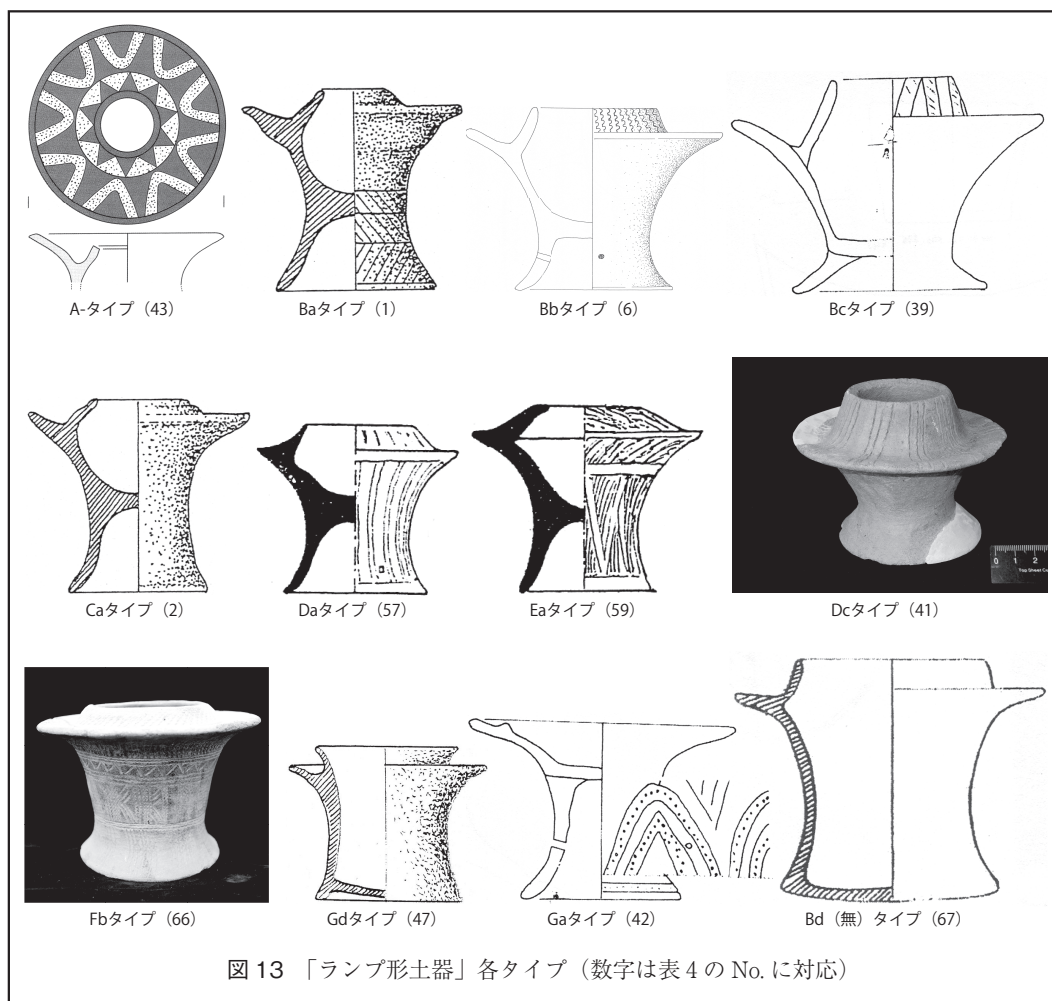


図 13 「ランプ形土器」各タイプ (数字は表 4 の No. に対応)

域にそれぞれ分布している。つまり、これら3地域で「ランプ形土器」の首座を占めるタイプが異なり、かつ、それぞれの地域でしか見られない形態が存在する。このことから、「ランプ形土器」の器形には地域性があらわれているといえる。これら3地域は、それぞれ典型サーフィン段階における地方的な中心地として発展していたと考えられる。

<ベトナム南部の「サーフィン文化的」な文化>

ベトナム中部の典型的なサーフィン文化遺跡の分布域から離れた、ベトナム南部ホーチミン市のゾンカーヴォ遺跡から出土した「ランプ形土器」は、口縁部が立ち上がる点、底部が平底で台を有していない点、無文である点で、ベトナム中部で出土するものとは異なるが、形態は酷似している（図13 - Bd（無）タイプ）。

ゾンカーヴォ遺跡からは、鉄器時代の甕棺墓やベトナム中部で出土するものと同タイプの耳飾が出土しており、サーフィン文化遺跡または「サーフィン文化的」な遺跡であるとしばしば論じられるが（Đặng Văn Thắng, Vũ Quốc Hiến 1995, Đặng Văn Thắng, Vũ Quốc Hiến, Nguyễn Thị Hậu, Ngô Thế Phong, Nguyễn Kim Dung, Nguyễn Lâm Cường 1998）、両者の甕棺や副葬土器の形態は大きく異なっている。ヴ・クオック・ヒエン Vũ Quốc Hiến氏は、ゾンカーヴォ遺跡について、サーフィン文化に属さずとも、サーフィン文化から何らかの影響を受けていると論じている（Vũ Quốc Hiến 2008: 126）。このように、ゾンカーヴォ遺跡で、甕棺墓や耳飾の存在に加えて「ランプ形土器」を模倣したような土器が出土していることは、ベトナム南部で典型サーフィン段階と関連する文化が存在していた可能性を示しているといえる。

5. 結論—サーフィン文化の時間的・空間的枠組

<ロンタイン段階>

ロンタイン段階は、副葬品構成と、土器の器種・器形・文様のいずれからしても、ビンチャウ段階および典型サーフィン段階とは大きく異なっている。ロンタイン段階の首座を占める「花瓶」は、ロンタイン遺跡の他にビンディン省チュオンサー Truông Xe（フーミー Phù Mỹ）遺跡で発見されており、チュオンサー遺跡の「花瓶」も、ロンタイン遺跡のものと同器形・文様ともに共通している。ロンタイン遺跡とチュオンサー遺跡の間の直線距離は約40kmと立地が近いことから、この「花瓶」は限られた時期に、限られた地域のみで存在していたと考えられる。

ロンタイン段階はビンチャウ段階もしくは典型サーフィン段階に直に発展していったとは考えにくく、サーフィン文化と分けて捉えるべきであると考えられる。つまり、ロンタイン段階はサーフィン文化に含めず、サーフィン文化よりも前にクアンガイ省からビンディン省の地域に存在した、後期新石器時代文化の一つとして位置付けたい。

<ビンチャウ段階>

ビンチャウ段階には青銅器が伴い、典型サーフィン段階には鉄器が伴うという点で、これら2段階の副葬品構成は異なっている。ビンチャウ段階に特徴的なタイプの土器は、ビンチャウ遺跡の他にクアンガイ省ゴークエ Gò Quê 遺跡、同じくクアンガイ省リーソン Lý Sơn 島ソムオック Xóm Ốc 遺跡で発見されている。ゴークエ遺跡はビンチャウ遺跡からおよそ20km、ソムオック遺跡はビンチャウ遺跡から海を隔てておよそ30kmのところに立地する。これらの遺跡はいずれも青銅器が伴い、土器の器種・器形・文様も共通している。

ビンチャウ段階の土器はクアンガイ省北部以南ではこれまでのところ発見されていない。しかし、以北のクアンナム省の典型サーフィン段階の中でも古い時期に属するとされる遺跡、例えばゴーマーヴォイ遺跡では、ビンチャウ段階の土器の要素を持つ土器が多数出土している。したがって、クアンガイ省北部を中心としたビンチャウ段階は、北上してクアンナム省の典型サーフィン段階に発展していったと考えられる。以上のことから、ビンチャウ段階はサーフィン文化の一段階としてサーフィン文化に含めないが、クアンナム省からクアンガイ省の地域に存在した、典型サーフィン段階の前段階にあたる青銅器時代文化の一つとして位置付けたい。

<典型サーフィン段階>

典型サーフィン段階の土器は、器種・器形・文様ともに、ロンタイン段階とビンチャウ段階と比べてバラエティに富んでいる。しかし、ゴーマーヴォイ遺跡出土土器の器形・文様分類から、典型サーフィン段階で首座を占める土器は、口縁部が外反し、頸部がくびれ、胴部が湾曲する、かつ縄蓆文がつく壺であることが確認できた。また、典型サーフィン段階に特有の「ランプ形土器」の器形・文様の型式分類によって、この器種の時期区分と分布域、地域性が明らかになった。

典型サーフィン段階は、ロンタイン段階とは差異が大きいものの、ビンチャウ段階とは共通する要素を持っている。また、長胴形または卵形の甕棺と帽子形の蓋が組み合わさる甕棺墓の分布域とはほぼ重なって出土している「ランプ形土器」は、時期区分、分布域、地域性といった点で、空間的・時間的枠組の指標となり得る。

以上をふまえて、「サーフィン文化」と言うべきは鉄器時代の典型サーフィン段階のみであるといえる。したがって、サーフィン文化の時間的・空間的枠組を提示するならば、クアンガイ省北部のビンチャウ段階から発展した、ベトナム中部、北はトゥアティエン・フエ省から南はビンディン省までの地域に分布した鉄器時代文化であり、主として長胴形または卵形の甕棺と帽子形の蓋が組み合わさり、副葬品として鉄器および「ランプ形土器」を含むバラエティに富んだ土器を伴う文化であるとまとめたい。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、指導教員の寺崎秀一郎先生、山形真理子先生（昭和女子大学）に、多大なるご指導・ご教授を賜りました。末筆ながら記して深く感謝申し上げます。

また、資料調査にご協力頂いたハノイ市歴史博物館、ハノイ国家大学人文社会科学大学人類学博物館、クアンナム省博物館、ズイスエン県サーフィン・チャンパ博物館、クアンガイ省博物館の方々に、心より御礼申し上げます。

注

- (1) 土器の内側に当て具を当て、外側から叩き板で叩きながら成形する技法である。縄を巻いた叩き板で叩くことで土器の外面につく縄の痕を、縄席文と呼ぶ。また、叩き板に縄を巻かず刻み目を彫り込む場合もあり、この場合、土器の外面には縄席文とは異なる叩き痕がつく。
- (2) コンザン遺跡では、1987年の試掘時および1993年の第一次発掘時にも「ランプ形土器」が出土しているが、出土点数等は報告されていない（Bùi Văn Liêm, Nguyễn Ngọc Quý, Nguyễn Đăng Cường, Trần Quý Thịnh, Hà Thắng, Đặng Quốc Toàn 2008）。
- (3) 「タロン Ta Long」は、筆者がハノイ市歴史博物館で実見した3点の「ランプ形土器」に注記されていた遺跡名であるが、ベトナム人考古学者によれば、ビンディン省のドンクォム遺跡と同一であるという。しかし、3点のうち1点は、クアンガイ省博物館に「サーフィン遺跡出土」として展示されている「ランプ形土器」の写真と同一個体であった。したがってこのタロンという遺跡名は、クアンガイ省のサーフィン遺跡を指す可能性もあるが、サーフィン遺跡とドンクォム遺跡は近距離に位置することから、この表記の差異は本論文の分析には影響しない。

図版出典

図1・2 筆者作成

図3～7 Reinecke, A., Nguyễn Chiêu, Lâm Thị Mỹ Dung 2002より引用・改変

図8 Chử Văn Tân, Ngô Sĩ Hồng 1978より引用・改変

図9 Nguyễn Thành Trai, Ngô Sĩ Hồng 1978より引用・改変

図10～12 筆者作成

図13 Vũ Quốc Hiền, Lê Ngọc Hùng, Chu Văn Vê 2008 (1、2)、Bùi Văn Liêm, Nguyễn Ngọc Quý, Nguyễn Đăng Cường, Trần Quý Thịnh, Hà Thắng, Đặng Quốc Toàn 2008 (6)、Lâm Thị Mỹ Dung 2005 (39、42)、Reinecke, A., Nguyễn Chiêu, Lâm Thị Mỹ Dung 2002 (43)、Vũ Quốc Hiền 1991 (47)、Parmentier, H. 1925 (57、59)、Đặng Văn Thắng, Vũ Quốc Hiền, Nguyễn Thị Hậu, Ngô Thế Phong, Nguyễn Kim Dung, Nguyễn Lân Cường 1998 (67)より引用・改変、筆者撮影 (41、66)

表1～4 筆者作成

主要引用参考文献一覧

<日本語文献>

石井彩子

2008 「ベトナム中部クアンナム省サーフィン文化遺跡出土土器の分類と考察」(2008年度早稲田大学第一文学部卒業論文)

2010 「ベトナム中部クアンナム省出土サーフィン土器の分類と傾向」『早稲田大学文研考古誌 溯航』第28号
(早稲田大学大学院文学研究科考古談話会) pp.1-20.

2011 「サーフィン文化の時間的・空間的枠組の再考—副葬土器を中心に—」(2011年度早稲田大学大学院文学研究科修士論文)

今村啓爾

1991 「東南アジア先史文化における海洋性—とくにサーフィン系文化について—」『東南アジア考古学会会報』
第11号 (東南アジア考古学会) pp.68-69.

ゲン・チュ (菊池誠一訳)

2010 「ベトナム中部の初期金属器時代」『海の道と考古学 インドシナ半島から日本へ』(高志書院) pp.14-29.

坂井隆、西村正雄、新田栄治

1998 『東南アジアの考古学』(同成社)

山形真理子

2009 「東南アジアにおける人間集団の拡散仮説とサーフィン文化」『アジア研究機構叢書人文学篇 第二巻
東アジアの歴史・民族・考古』(雄山閣) pp.320-354.

2010a 「南シナ海両岸の鉄器時代土器」菊池徹夫編『比較考古学の新天地』(同成社) pp.960-970.

2010b 「サーフィン—カラナイ土器伝統」再考」『南海を巡る考古学』(同成社) pp.95-129.

横倉雅幸

1987 「ヴェトナム出土の球状耳飾り」『東南アジア考古学会会報』第7号 (東南アジア考古学会) pp.9-11.

<英語文献>

Ha Van Tan

1988 Current Studies on Metal Age in Vietnam (ベトナムにおける金属器時代研究の現状), 東南アジア考古学会会報, 第8号, 東南アジア考古学会, pp.11-16.

Yamagata Mariko

2006 Inland Sa Huynh Culture along the Thu Bon River Valley in Central Vietnam, *Uncovering Southeast Asia's Past*, NUS Press Singapore, pp.168-183.

<ベトナム語文献>

Bùi Văn Liêm, Nguyễn Ngọc Quý, Nguyễn Đăng Cường, Trần Quý Thịnh, Hà Thăng, Đặng Quốc Toàn

2008 *Báo cáo Khai quật & Chính lý Di tích Cồn Ràng Lân thứ 3, thôn Phụ ở xã Hương Chừ huyện Hương Trà tỉnh Thừa Thiên Huế*, Hà Nội, Thư viện Viện Khảo cổ học.

Chữ Văn Tấn, Ngô Sĩ Hồng

1978 *Báo cáo khai quật Long Thạnh*, Thư viện Viện Khảo cổ học.

Đặng Văn Thắng, Vũ Quốc Hiến

1995 Khai quật di chỉ Giồng Cá Vồ (Cần Giờ, Thành phố Hồ Chí Minh), Khảo cổ học, 1995(2), pp.3-19.

Đặng Văn Thắng, Vũ Quốc Hiến, Nguyễn Thị Hậu, Ngô Thế Phong, Nguyễn Kim Dung, Nguyễn Lân Cường

1998 *Khảo cổ học tiền sử và sơ sử thành phố Hồ Chí Minh*, Nhà xuất bản Trẻ Thành Phố Hồ Chí Minh.

Lâm Thị Mỹ Dung

2005 Một số vấn đề về khảo cổ học ven biển miền Trung Việt Nam giai đoạn chuyển tiếp từ văn hoá Sa Huỳnh sang văn hoá Champa, Mã số QG.03.15, Đại học Quốc gia Hà Nội, Trường Đại học Khoa Học Xã Hội & Nhân Văn.

Nguyễn Khắc Sử

2010 Văn hoá Sa Huỳnh—văn hoá Lung Leng: Những mối liên hệ, Khảo cổ học, 2010(5), pp.64-78.

Nguyễn Thành Trai, Ngô Sĩ Hồng

1978 *Báo cáo khai quật Bình Châu (Nghĩa Bình)*, Thư viện Viện Khảo cổ học.

Reinecke, A., Nguyễn Chiêu, Lâm Thị Mỹ Dung

2002 *Những phát hiện mới về văn hóa Sa Huỳnh, Khu mộ táng Gò Mả Vôi và vị thế văn hóa của nó ở miền Trung Việt Nam*, Linden Soft.

Sở văn hóa, Thể thao và Du lịch Quảng Ngãi

2009 *Văn hóa Sa Huỳnh ở Quảng Ngãi*.

Vũ Công Quý

1991 *Văn hóa Sa Huỳnh*, Nhà xuất bản văn hóa dân tộc viện Đông Nam Á, Hà Nội.

Vũ Quốc Hiền

1991 Bả mộ chum Pa-Xua(Quảng Nam-Đà Nẵng), *VBTL SVNTBKH*, 1991, Viện Bảo tàng Lịch sử Việt Nam, pp.167-179.

2008 Vài suy nghĩ về các di tích mộ chum ở Đông Nam Bộ, *Bảo tàng Lịch sử Việt Nam Thông báo khoa học*, 2008, Bảo tàng Lịch sử Việt Nam, pp.118-128.

Vũ Quốc Hiền, Lê Ngọc Hùng, Chu Văn Vệ

2008 *Báo cáo kết quả khai quật di chỉ Cồn Dài-Thừa Thiên Huế năm 2006*, Hà Nội, Bảo tàng Lịch sử Việt Nam, Sở VH-TT Thừa Thiên Huế.

<フランス語文献>

Parmentier, H.

1925 Notes d' archeologie Indochinoise, *Bulletin de l' Ecole Francaise d' Extreme-Orient*, Tome XXIV.-1924, l' Ecole Francaise d' Extreme-Orient, pp.325-343.